

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本生物教育学会

(代表者 渡邊 重義 会員数 約800人)

T E L 03-3816-0738

「生物基礎」

1 前文

日本生物教育学会では、全国の会員の中から大学入学共通テスト試験問題検討ワーキンググループ委員 37名を選出し、令和8年度共通テストについて検討を依頼した。ワーキンググループの委員は、高等学校や博物館などにおいて生物教育に携わっている会員で構成されている。各委員は以下の観点を重視して検討を行った。

- (1) 学習指導要領における「生物基礎」の内容とその扱いを踏まえた出題となっているか。
- (2) 出題の内容が、高等学校における「生物基礎」の学習の到達度を見るものとして妥当であるか。
- (3) 知識を問う問題と、科学的な思考力を問う問題（知識を活用する問題・考察する力を問う問題）とのバランスが取れているか。
- (4) 高等学校「生物基礎」の各単元からバランス良く出題されているか。
- (5) 用語の使い方や表現に関して、教科書の記載と異なっていたり、誤解を与えたりするものがないか。この他に、問題数、配点の妥当性、問題の難易度などについても検討を行った。集約された意見の中から、多くの委員に共通する意見及び特記すべき意見をまとめ、以下に報告する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

共通テスト追・再試験「生物基礎」では、学習指導要領における「生物基礎」の三つの大項目から三つの大問が配置された。出題された内容は、おおむね適切であった。全体の難易度は本試験と大差ないと考えているが、科学的な思考力を問う問題よりも知識を問う問題が多く、本試験と追・再試験とで解答に求められる資質・能力には違いがあった。

設問数は16個、マーク数は17個であり、本試験のマーク数より1個多かった。選択肢の数は、4個が4問、5個が2問、6個が6問、7個が1問、8個が3問であった。選択肢が6個以上に及ぶ設問が本試験の3問に対し追・再試験では10問であり、令和7年度本試験の7問に対しても多かった。ただし、3問出題された選択肢が8個の問題は、いずれも二者択一の間を三つつけて完全解答にしたものであり、問題の難易度に大きな影響を与えるものではなかったと考えられる。

大問ごとの配点は、第1問で17点、第2問で18点、第3問で15点と適切であり、個々の設問についての配点もおおむね適切であった。

問題の形式としては、「過不足なく」選ぶ問題が1問出題されており、この問題に部分正答が設けられていた。適当な記述を1個選んだ場合にも得点が与えられ、受験者の思考の段階を適切に識別できたと考えられる。しかし、「過不足なく」選ぶ形式の問題は、受験者が解答に確信を持ちにくいという点で精神的な負担が大きいと考えられることから、出題にあたっては今回のように部分正答を設けるなど、引き続き最大限の注意を払っていただきたい。図は本試験と同様10個であり、いずれも見やすく整っており受験者が解答しやすいものとなっていた。

以下に、各問題について検討した結果を述べる。

第1問 生物の特徴及び遺伝子とその働きに関して、知識を問う問題、知識を活用する問題、考察する力を問う問題が出題された。Aでは細胞の構造と酵素の働きについての問題が出題され、Bでは細胞小器官の働きと核酸の塩基配列に見られる規則性、体細胞分裂についての問題が出題された。

問1 原核細胞と真核細胞の区別についての知識を問う問題として適切である。ページをさかのぼって図を参照する必要があるため、レイアウトに工夫の余地があるという指摘が複数あった。

問2 原核細胞と真核細胞の構造上の違いについての知識を問う問題として適切である。設問文の「真核細胞は持つが、細菌は持たない」という表現について、真核細胞の対義語は原核細胞であるため、真核細胞と細菌を対比させることに違和感があるという意見があった。

問3 酵素の有無と化学反応の進み方の違いについて考察する力を問う問題として適切である。

問4 細胞の呼吸と光合成における各過程と反応物についての知識を問う問題として適切である。呼吸・光合成という概念に関連する知識が整理されて理解されているかを識別できる問題であるという意見があった。

問5 mRNA と DNA の塩基配列に見られる対応関係とその規則性に関する知識を活用する問題として適切である。

問6 体細胞分裂の実験結果をもとに、半保存的複製と染色体の構造に関する知識を活用する問題として望まれる良問である。半保存的複製と細胞分裂時の DNA の分配を総合的に理解しているかを実験と図から問う本質的な問題であるという意見が複数あった。

第2問 ヒトの体内環境の維持に関して、知識を問う問題と知識を活用する問題が出題された。Aでは自律神経系と内分泌系による調節について出題され、Bでは生体防御について出題された。

問1 自律神経系と内分泌系による恒常性の維持についての知識を問う問題として適切である。一方で、問うている知識が細かいのではないかという意見があった。

問2 自律神経系による瞳孔の調節に関する知識を活用する問題として適切である。瞳孔の調節については「生物」の範囲であり、「生物基礎」のみの履修者は設問文と図のみから瞳孔の収縮・拡大のしくみについて推測する必要があり、自律神経に関する理解を問う問題の形式としては不適切だったのではないかという意見もあった。

問3 脳と恒常性維持の関係についての知識を問う問題である。設問文の「脳死の判定」や選択肢の「脳死状態」という表現は脳死の「判定基準」や「法的な扱い」を連想させ、生物で学習した以上の知識を問うていると受験者に勘違いさせる恐れがある。出題にあたっては、表現を「脳死の場合」に統一するなど、十分に配慮されたい。

問4 体液についての知識を問う問題として適切である。

問5 血液凝固についての知識を問う問題として適切である。鼻血という身近な題材を扱っており、このような設問は日常と生物の知識を結び付けて理解しようとする学習を促すため望ましい。

問6 自然免疫と獲得免疫の関係についての知識を問う問題として適切である。炎症によって毛細血管が拡張することについては、問うている知識が細かいのではないかという意見があった。

第3問 植生の遷移と生態系に関して、知識を問う問題と考察する力を問う問題が出題された。Aでは植生の遷移に伴う植物相の変化についての問題が出題され、Bでは生態系の保全と野生

動物の食性の季節変動についての問題が出題された。

問1 植生の遷移についての知識を問う問題として適切である。

問2 ギャップの大きさと陽樹・陰樹の苗木の成長の関係について調べた実験に関して、その結果をもとに考察する力を問う問題として適切である。陽樹と陰樹に関する知識を活用しながら、与えられた複数の情報を読み取り考察する点で探究の過程を問う問題となっており、良問であるという意見も複数あった。

問3 生態系の保全についての知識を問う問題として適切である。

問4 クマの食物が季節によってどのように変化するかを調査したグラフをもとに考察する力を問う問題として適切である。近年の社会問題の一つである野生動物の出現と関連する内容であり、糞から食物の種類を特定するという調査方法も含めて興味・関心を高める設問であったという意見があった。「過不足なく」選ぶ形式の問題であったが、図から読み取れる事実のみを問うていることから根拠をもって解答できる点、部分正答として②または③を選んだ場合にも1点が与えられている点など、よく工夫されていた。

3 総評・まとめ

これまでと同様、共通テストの問題作成方針にある「日常生活や社会との関連を考察し、科学的な事象・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する」が意識された出題となった。特に、第2問の問2・問5、第3問の問4は、日常生活や社会とつながる内容を扱っており、日常と生物の知識を結び付けて理解しようとする学習を促すため望ましい。

一方で、昨年度は知識を問う問題が7個(44%)、知識を活用する問題が3個(19%)、考察する力を問う問題が6個(38%)であったが、今年度は知識を問う問題が10個(67.5%)、知識を活用する問題が3個(19%)、考察する力を問う問題が3個(19%)となり、今年度の本試験(それぞれ8個50%・2個13%・6個38%)と比較しても知識を問う問題の割合が高かった。実際の生物現象を定量したデータを用いて考察するような、探究の過程を強く意識させる出題は第3問の問2に限られていた。また、本試験であったように(1)、(2)のような小問の流れを作り受験者の思考を促すような問題についても出題を期待したい。

昨年度は本試験と比べて追・再試験のほうが考察する力を問う問題が多い点を指摘したが、今年度は逆の結果となった。同一科目の本試験と追・再試験でありながら、解答にあたって求められる資質・能力のバランスが異なる状況が続いているため、慎重な調整をお願いしたい。

4 今後の共通テストへの要望

本試験同様、学習指導要領のねらいを踏まえた上で、分量・難易度・出題数ともにバランス良く構成されており、出題の傾向が改善されていると考える。また、クマの食性などの日常生活に関連するものなど工夫がされていた。これまでの問題作成部会の真摯な取組に感謝申し上げる。しかし、追・再試験は本試験の代替となる試験であるため、本試験と追・再試験は同様の観点で出題されるべきである。今後は知識を問う問題と科学的な思考力を問う問題の出題バランスなど、問題の構成においても本試験と追・再試験が同等になることを望む。学力としては、知識・技能のみならず思考力、判断力、表現力等も重要であるため、知識を問う問題(概念的な知識を問う問題を主体としつつ、事実に知識を問う問題も含む)、知識の活用を問う問題、考察する力を問う問題のバランスを意識しつつ、受験者が解答時間内に十分に思考できるような出題が望まれる。

次年度以降の共通テストにおいても、科学的な思考力を測る出題の内容、難易度と配点、分量

について適切なバランスに十分に配慮しながら，科目間及び本試験と追・再試験の間で大きな差が出ないように留意して作問に当たっていただきたい。また，第3問の問2のような，探究の過程を問うような問題については，今後も継続して出題するようお願いしたい。

『生物』

1 前文

日本生物教育学会では、全国の会員の中から大学入学共通テスト試験問題検討ワーキンググループ委員 37 名を選出し、令和 8 年度共通テストについて検討を依頼した。ワーキンググループの委員は、高等学校や博物館などにおいて生物教育に携わっている会員で構成されている。各委員は以下の観点を重視して検討を行った。

- (1) 学習指導要領における「生物」の内容とその扱いを踏まえた出題となっているか。
- (2) 出題の内容が、高等学校における「生物」の学習の到達度を見るものとして妥当であるか。
- (3) 知識を問う問題と、科学的な思考力を問う問題（知識を活用する問題・考察する力を問う問題）とのバランスが取れているか。
- (4) 高等学校「生物」の各単元からバランス良く出題されているか。
- (5) 用語の使い方や表現に関して、教科書の記載と異なっていたり、誤解を与えたりするものがないか。この他に、問題数、配点の妥当性、問題の難易度などについても検討を行った。集約された意見の中から、多くの委員に共通する意見及び特記すべき意見をまとめ、以下に報告する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

共通テスト追・再試験「生物」で出題された内容は、学習指導要領における「生物」の五つの大項目から分野融合問題を含む 5 題が出題され、おおむね適切であった。設問数は 19 と本試験より二つ多く、昨年度から三つ減った。マーク数は 25 で、本試験、昨年度と変わらなかった。

大問ごとの配点は、全て 20 点であり、A・B の分題形式の出題はなかった。個々の設問の配点は 5 点以上のものが 6 問、4 点のものが本試験同様に 15 問であった。また部分正答が設定された設問はなかった。配点は全体としても個々の設問についても適切であったが、部分正答については受験者の思考の段階を適切に識別するために有効な手段であると考えられるため、配点の大きさに関わらず本試験と同様に積極的に導入することが望ましい。

問題形式としては、組合せを選ぶ設問が六つ、正答を二つ選択する設問が一つであり、昨年度と比べると増加した。また、「過不足なく」選ぶ形式の出題が 2 問あった。その形式で出題された第 2 問の間 1 は解答が平易であったことから基本的な知識を問う問題として妥当な出題であったと考えられるが、第 4 問の間 3(2)については「過不足なく」選ぶ形式であったことにより難度が高まった出題であったと考えられる。「過不足なく」選ぶ形式の出題は解答に時間を要し、受験者が解答に確信が持てないという精神的な負担も大きいことから、出題にあたっては引き続き最大限の注意を払っていただきたい。

各大問は、学習指導要領の「生物」の大項目からそれぞれ出題されたが、令和 7 年度と同様に大項目の分野融合問題が出題されており、受験者が生物の各単元についてつながりをもって捉える学習を促すことから歓迎されるものであり、今後も出題が望まれる。

以下に、各問題について検討した結果を述べる。

第 1 問 生物の系統と進化に関して、知識を問う問題と知識を活用する問題と考察する力を問う問題が出題された。

- 問 1 生物の分類や学名に関する知識を問う問題である。
- 問 2 進化における遺伝的な構成の変化に関する知識を問う問題として適切である。
- 問 3 分子系統樹に関する知識を活用する問題として適切である。

問4 高山植物が種分化していく過程について、考察する力を問う問題として適切である。

問5 気候の変動が昆虫の活動の変化と高山植物の結実に与える影響について、実験結果に基づいて考察する力を問う問題として望まれる良問である。受験者にとって身近である地球温暖化（気温上昇）が生物の行動に与える影響として興味深く、受験者の学びにもなる良問であるという意見や、複数のグラフを読み考察する力を問う問題として適切な難度であるという意見があった。

第2問 生態系の物質生産と物質循環に関して、知識を問う問題と考察する力を問う問題が出題された。

問1 有機窒素化合物に関する知識を問う問題として適切である。「過不足なく」選ぶ形式の出題であったが解答が平易であった。

問2 硝化に関する知識を問う問題として適切である。

問3(1) 無機窒素の吸収速度について、実験結果に基づいて考察する力を問う問題として適切である。

問3(2) 実験の結果から立てられた仮説を検証する実験について考察する力を問う問題として適切である。仮説検証をする実験を問う問題では「最も適当なものを選ぶ」形式にする方がよいという意見があった。

問4 窒素同化に関する知識と図やリード文から得られた情報をもとに考察する力を問う問題として適切である。

第3問 発生及び動物の反応と行動に関して、知識を問う問題と考察する力を問う問題が出題された。

問1 脊髄における神経の配置について知識を問う問題として適切である。腹根・背根の経路は細かい知識を問うているという意見があった。

問2 ニワトリ胚の細胞が神経細胞に分化する条件について、実験結果に基づいて考察する力を問う問題として適切である。

問3 ニワトリ胚の細胞が異なる神経細胞に分化する条件について、与えられた情報と実験結果に基づいて考察する力を問う問題として適切である。

問4 静止状態の神経細胞におけるカリウムチャンネルとナトリウムポンプの K^+ の移動に関する知識を問う問題として適切である。

第4問 植物の環境応答を中心に光合成と遺伝子の発現を分野融合的に、知識を問う問題と考察する力を問う問題が出題された。

問1 光に対する動物と植物の応答や反応及び光合成に関して、知識を問う問題として適切である。Pr型については「赤色光吸収型」を併記する方が良いという意見があった。

問2 真核生物の遺伝子発現やその調節に関して、知識を問う問題として適切である。

問3 植物の照射された光の種類による反応の違いに関して、複数の実験結果に基づいて考察する力を問う問題として適切である。

問4 植物の照射された光の種類による反応の違いが生じる仕組みに関して、仮説を検証する実験とその結果を予想するという考察する力を問う問題として適切である。

第5問 個体群と生物群集に関する知識を問う問題と知識を活用する問題、考察する力を問う問題が出題された。考察する力を問う良問が多い一方で考察する力を問う問題が続き受験者にとっては負担が大きいものであった。

問1 同種・異種の生物どうしの関わりに関する知識を問う問題として適切である。

問2(1) 個体群密度に関する考察する力を問う問題として望まれる良問である。環境変化によ

る瀬と淵のイワナの個体群密度の変化に関して、与えられた条件から結果を予測し、グラフ内の数値の変化として判断する力を問う問題として望まれる良問であるという意見があった。一方、問題文が長く処理する情報量が多いことや正確なグラフの予測を行うため、受験者が解答に要する時間がかかり負担の大きいものであった。

問2(2) 外来生物の移入による影響に関する望まれる良問である。間接効果も含めて考察する必要があり、与えられた情報から食物網を俯瞰的に分析させる良問であるという意見があった。

問3(1) 菌根菌と植物の共生関係について実験結果に基づいて考察する力を問う問題として適切である。

問3(2) 2種の菌根菌と植物間での物質の供給についてのグラフの内容を読み取り考察する問題として良問であった。共生関係を進化の見方を働かせて考察すると、受験者の深い学びになる良問であるという意見があった。

3 総評・まとめ

本試験と同様に、共通テストの問題作成方針にある「科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する」が問題によく表れていた。また、「受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題」についても工夫した出題が見られていた。これまでの問題作成部会の真摯な取り組みに感謝申し上げる。

一つ一つの設問においては、知識を問う問題が9問(約39%)、知識を活用する問題が1問(約4%)、考察する力を問う問題が13問(約57%)出題され、受験者の思考を促す考察する力を問う良問もバランス良く出題されており、全体として分量・難易度ともに適切であった。しかし、考察する力を問う問題の出題割合が多く、受験者は解答に時間を要したことが考えられる。概念的な知識を用いて思考する「知識を活用する問題」の出題を増やすなど、試験全体の時間配分について考慮した出題が望まれる。

また、本試験同様に、大問の後半になると図やグラフなどを前のページに戻って参照しなければならない状況となっており、解答に必要な情報をどのように提示するかについては改善し、受験者が十分に思考できる時間が確保できるよう配慮いただきたい。

配点は3点のものから6点のものまでであったが、各配点の問題数が本試験と同じであったのはよい。また、複数の分野から出題される方針については、受験者に考察を促し生物に関する学習を総合的に捉えることを促すと考えられ、今後も出題が望まれる。

4 今後の共通テストへの要望

今年度の共通テスト追・再試験「生物」では、適切に設計された考察問題が多く、全体の難易度や出題数についてもバランス良く構成されていた。総じておおむね適切な出題であったと考える。

昨年度の試験に続き、第3問、第4問で複数の分野を関連付ける問題が出題された。これらは受験者に考察を促し生物に関する学習を総合的に捉えることにつながると考えられ、今後も出題が望まれる。

知識を活用する問題と考察する力を問う問題の出題において、「探究の過程」を意識した出題が増えていることが今回のテストでも維持されており、今後もこの方向性を歓迎する。取り上げられた題材は適切であり、科学的な思考力を問うために練られた問題であった。

本学会からの継続的な要望として、受験者が解答時間内に十分思考することができるよう、様々な面からの検討を求めているが、「検討すべき情報が多い選択肢の削減」「各大問における小問1を大問全体の把握につながるような出題や比較的平易な問題にする」「問いの文章をわかりやすくする」などの配慮がなされていたことについて、深く感謝申し上げます。

知識を問う問題の割合が、39%と本試験より高い。知識を問う問題の出題にあたっては、概念的知識の理解を問うことや、事実的知識を問う場合には細かすぎる知識にならないように注意を払っていただき、且つ大問全体の把握につながるような出題となることを望む。また、知識を問う問題や科学的な思考力を問う問題のバランスについては、本試験と大きな差がでないことを望む。

また、問題の難易度、「過不足なく」選ぶ形式の出題、部分正答のある出題についても、本試験と大きな差がでないようにご留意いただきたい。

次年度以降の共通テストにおいても、科学的な思考力を測る出題の内容、難易度と配点、分量について適切なバランスに十分に配慮しながら、科目間及び本試験と追・再試験の間で大きな差が出ないように留意して作問に当たっていただきたい。

② 日本生物教育会

(代表者 後藤 洋士 会員数 約 10,000 人)

T E L 03-3411-5115

「生物基礎」

1 前文

日本生物教育会は、全国の国公立の主に高等学校の理科（生物）を担当する教員の研修の目的で、昭和 21 年に設立された教育研究団体である。意見評価をまとめるに当たり、全国の各都道府県支部（加盟 46 支部）に検討を依頼し、次の(1)～(9)の観点から意見を集約した。

- (1) 学習指導要領の趣旨に沿った内容となっているか。
- (2) 受験者が使用している教科書によって不利益が生じないように、共通した内容から出題されているか。
- (3) 全領域からバランス良く出題されているか。
- (4) 生命現象の理解、そのための基礎的知識の習得を見る問題が出題されているか。
- (5) 探究の過程を重視し、科学的思考力を問う問題が出題されているか。
- (6) 扱われる生物の種類・地域性に偏りが無いか。
- (7) 出題内容・難易度・表現・表記などは適切か。
- (8) 設問数・配点・設問形式は適切か。
- (9) 上記(1)～(8)について、本試験と追・再試験でバランスはとれているか。

以下にその結果をまとめたものを記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

試験問題の程度や形式等に関する特筆すべき意見は、以下の 4 点である。

- (1) 難易度・設問数・配点はおおむね適切であった。
- (2) 単元のバランスは適切であった。
- (3) 知識問題と思考問題のバランスはおおむね適切であったが、大問ごとの思考問題の数に偏りがあった。
- (4) 「過不足なく」選ぶ形式による不適切な出題がみられた。

上記(1)に関して、設問ごとの難易度を見るとおおむね標準的な難易度であった。設問数 16、マーク数 17 という数は、昨年度（設問数 16、マーク数 17）と同様であり、受験者が全問を解くために十分な時間を確保できる設問設定がなされていた。配点に関してもおおむね適切であった。本試験と比較すると、思考問題が少ない分、やや易しい印象を受けるが、全体としては適切な難易度であったと考えられる。

上記(2)に関して、単元のバランスを見ると、大問が 3 問で、学習指導要領の三つの大単元から 1 題ずつ出題され、更に、大問それぞれが A・B の 2 パートに分かれていた。各中単元からまんべんなく出題されており、出題範囲のバランスは適切であった。

上記(3)に関して、全体としては知識問題と思考問題のバランスはとれていた。これまでの共通テストと同様に、単純な知識問題ではなく、「生物基礎」の学習内容を基に考えさせる出題が増えていることは歓迎したい。また、探究するために必要な資質・能力を問う問題が見られたことについて評価する。一方で、第 2 問については知識問題が中心の構成であり、細かな教科書の細かな知識が

要求される問題が多かった。大問ごとにバランス良く探究的な思考力を問う問題を出題するなど問題構成やその内容に工夫を求めたい。

上記(4)に関して、第3問の問4では、図を読み取る問題で正誤判定に迷う表現が「過不足なく」選ぶ形式の選択肢に含まれており、このような出題は不適切であった。仮に正誤判定が明確なものであったとしても、難易度調整のためにこのような出題形式をとることはやめていただきたい。

以下に個々の設問の分析結果を報告する。

第1問 「生物の特徴」の単元からの出題で、A問題は「生物の特徴」に関する問題、B問題は「生物の特徴」及び「遺伝子とその働き」に関する内容であった。また、知識問題、知識を活用する問題、思考力を問う問題が出題されており、出題分野、出題内容ともにバランスのとれた構成となっていた。

問1 「細胞の構造」に関する知識問題。三つの生物の細胞が真核細胞なのか原核細胞なのかを問う適切な難易度の問題であった。図を参考に答える問題であるが、それぞれの生物はよく知られているものであり、図と関連させることなく知識で解ける問題であった。

問2 「細胞の構造」に関する知識問題。真核生物と原核生物の構造について基礎的な知識を問う適切な出題であった。単に「真核生物が持つものを選び」という問いではなく、「真核生物は持つが、細菌は持たないものはどれか」とすることで受験者に考えさせる出題となっていた。

問3 「代謝における酵素のはたらき」に関する知識活用問題。一遺伝子一酵素説を連想させる問題であるが、その知識がなくとも問題文を読み、酵素反応の流れを示した図を理解すれば問題なく解答できる内容であり、適切な出題であった。

問4 「光合成と呼吸」に関する知識問題。代謝における物質生産について問う適切な出題であった。問題文の中で、考える対象がミトコンドリアと葉緑体のみであり、それ以外の部分は考慮しなくて良いことが明確に分かるようにしてほしいという意見もあった。

問5 「塩基の相補性」に関する標準的な計算問題。mRNAの塩基組成から、もととなるDNAの塩基の割合を計算させる問題であった。

問6 「DNAの半保存的複製」に関する知識活用問題。半保存的複製と細胞分裂における染色体の分配を題材にした問題であった。適切な図を選ばせる出題形式の工夫は評価できる。教科書の内容を正しく理解していることが求められ、問題文の読み取りに苦勞することから、難易度はやや高いと思われる。

第2問 「ヒトの体の調節」の単元からの出題で、A問題は「神経系と内分泌系による調節」に関する問題、B問題は「免疫」に関する問題であった。出題分野のバランスは良いが、データ読み取り問題や考察問題がなく、出題形式が知識問題に偏っているという印象を受けた。適切な難易度の考察問題が1問あるとバランスが良くなるものと思われる。

問1 「恒常性の維持における視床下部の関わり」に関する誤答選択による知識問題。具体的なホルモンの名称を出して判断させていないことで、どのホルモンを選択肢が取り上げているのか生徒に推察させる点は評価できる。一方で、説明文に該当するホルモンがない②についてはどのホルモンを題材にしているのかと考えてしまうと、正誤判定が難しいとの意見もあった。

問2 「瞳孔における入光量の調節」に関する知識活用問題。自律神経の働きに関する知識と図の読み取りが組み合わされた適切な難易度の出題であった。

問3 「脳死」に関する知識問題。脳死の定義は“すべての脳の機能が停止し回復不能な状態”を指すが、③の文章だけでは、人工呼吸器等の処置を行っているか状況についての説明がな

く、脳死状態において、一部の臓器が正常に機能するという判断をすることが難しいとの意見があった。

問4 「ヒトの体液」に関する知識問題。おおむね適切な難易度の出題であった。

問5 「血液凝固」に関する知識問題。基本的な知識を問う適切な出題であった。

問6 「自然免疫（炎症）」に関する知識問題。昨年も「炎症」について出題があったため2年連続となる。標準的な難易度の出題であった。

第3問 「生物の多様性と生態系」からの出題で、A問題は「植生と遷移」に関する問題、B問題は「生態系とその保全」に関する問題であった。A・Bともに、実験結果のグラフを基に事象を適切に判断させる問題構成であり、標準的な知識と思考力を問う適切な問題であった。ただし、思考問題が2題あり大問内での考察問題の割合が大きいため、大問ごとにバランスをとっていただきたい。

問1 「植生と遷移」に関する知識問題。基本的な知識を問う適切な難易度の出題であった。

問2 「ギャップの大きさが樹種の成長に及ぼす影響」に関する実験考察問題。与えられる情報が多かったが知識を合わせて判断できる内容となっていたため適切な難易度の出題であり、良問であった。

問3 「生態系とその保全」に関する知識問題。部分点が与えられている。教科書の基礎的な内容を問う適切な出題である。

問4 「クマの食物の季節変化」に関するデータ読み取り問題。「過不足なく」選ぶ形式。正答二つのうち一方のみの選択肢を選択した場合は4点中1点が与えられた。⑤について「9月前半以降は脊椎動物の占める割合が多かった。」という記述があるが、正確には8月後半には脊椎動物の占める割合の方が多いため、受験者が判断に苦しんだと考えられる。この選択肢を含んだうえで「過不足なく」選ぶことを求めるのは不適切であり、正誤判定が明確にできる文章にしていただきたい。また、文章の内容とは別に「過不足なく」選ぶ形式の出題はやめていただきたい。2025年に大いに話題となったクマを題材とした点は評価できるが、「ヒグマ」「ヤマブドウ」など適切な種名を用いるべきという意見や、本文中と記述①～③の中でどういう出題意図をもって「昆虫類」を「無脊椎動物」と書き換えているのかを疑問視する意見もあった。

3 総評・まとめ

本年度の追・再試験は、昨年度と同様に単純な知識だけではなく、「生物基礎」で学習した知識を活用して思考させる出題が見受けられた。また、文章や図表などのデータを読み取る力、思考力や数的処理能力を問う出題、探究的な学習過程を意識した出題について高く評価している。思考力・判断力・表現力を重視した出題意図が明確であり、これは日頃から探究活動を通じて論理的思考力を育成してほしいという現場への授業改善のメッセージとして受け止めている。問題全体を通して、おおむね30分という、試験時間内に十分に思考できる時間が確保された問題構成であったが、探究の過程を重視した思考問題を各大問に1題ずつ配置することで各大問の難易度や取り組みにかかる時間のバランスがとれると考える。

知識だけを求めるのではなく単元の本質的な理解を問うようにした工夫が見られる良問も出題されており、多くの制約がある中で問題作成には多大な労力と時間が費やされていることが推察される。問題作成を担当された方々には敬意を表するとともに、深く感謝申し上げる。

4 今後の共通テストへの要望

今年度の追・再試験の難易度は適切であったが、知識問題の比重が全体的に大きく、大問ごとで思考問題の配分が異なった。各大問に1題ずつ出題するなど、バランス良く思考問題を配分していただけるよう要望したい。大問ごとに、およそ一定の割合で知識を問う問題を出題し、残りを知識や与えられた資料に基づいて解く思考問題とするなどの大枠を、過去問題の正答率等を参考にあらかじめ定めた上で、作問者がその枠内で作題されることをお願いしたい。これにより、全体の難易度、すなわち平均点の安定が図られるとともに、受験者に対して基本知識と思考力・判断力の両方を身に付けることの重要性を伝えるメッセージとなるはずである。今後も、難易度を適切に保ちつつ、方針に示されているように、基本的な概念や原理・法則の理解を測る知識問題と科学的に探究を進める過程についての理解を測る思考問題とのバランスが取れた作題をお願いしたい。

また、受験者が選択する科目によって不公平が生じることのないよう、共通テストとして科目間の難易度について十分な調整が図られることをお願いしたい。

最後に、本会では以前より、「過不足なく」選ぶ形式の出題についてはやめていただくよう要望してきた。この形式の出題は、選択肢の吟味に時間がかかりすぎて過度に難易度を上げることにつながるため、やめていただくことを改めて強く要望する。

『生物』

1 前文

日本生物教育会は、全国の国公私立の主に高等学校の理科（生物）を担当する教員の研修の目的で、昭和21年に設立された教育研究団体である。意見評価をまとめるに当たり、全国の各都道府県支部（加盟46支部）に検討を依頼し、その意見を集約した。（なお、評価の観点は「生物基礎」と同じものである）

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

主に以下のような意見があった。

- (1) 学習指導要領の趣旨に沿った工夫された出題が多く見られた。
- (2) 題材の選定に偏りが見られ、第2問及び第5問はいずれも同一単元「生態と環境」からの出題であった。さらに、本試験と共通するテーマや題材が用いられており、類似した内容が続いた点特徴的であった。加えて、「窒素代謝」及び「窒素同化」に関わる題材も近年繰り返し扱われている状況が見られた。
- (3) 設問数、配点及び問題量は本試験と同様であったが、内容や難易度の工夫によって、試験時間内に無理なく解答可能な構成であった。一方で、本会が廃止を求めている「過不足なく」選ぶ出題形式の出題が複数見られた。
- (4) 知識問題の割合が大幅に増加し、知識を活用した設問の割合が減少した。その結果、本試験と比べ難易度は相対的に低くなったと考えられる。

以下にその詳細をまとめたものを記す。

上記(1)に関して、第1問は、生物に関する基本的な知識を問う設問を導入として、資料をもとに段階的に考察させる問題が出題されており、全体として日常の授業や教科書を通して学習を積み重ねてきた受験者の到達度を適切に測ることができるものと評価できる。また、第2問の間3(2)のように仮説を検証するための実験計画を考察させる設問や、第4問の間3(2)のように仮説検証実験の結果から、条件設定を選択させる設問が出題されていた。このような出題は、生物学的に探究する資質・能力と態度を身に付けさせるとともに、生物や生物現象を分析的、総合的に考察する能力を育むことを目的とする学習指導要領の趣旨に沿った内容であった。

上記(2)に関して、題材の選定に偏りが見られた。特に、第2問及び第5問はいずれも同一単元「生態と環境」からの出題であった。全体のバランスを考慮すると、第2問は「生命現象と物質」の単元から出題されることが望ましい。

さらに、第2問は本試験「生物」第5問の間4と「窒素の利用」という同じテーマが扱われ、第5問の間3は本試験「生物基礎」第1問A問題と「菌根菌との共生関係」という同じ題材が扱われた。植物の栄養利用や根圏相互作用は重要なテーマであるものの、本試験及び追・再試験の間で類似した題材が繰り返し扱われている点については、出題内容のバランスの観点から課題がある。

また、窒素代謝及び窒素同化に関わる出題については、令和7年度「生物」追・再試験第2問、令和5年度「生物」本試験第4問と、近年類似した題材が続いており、一部の分野への出題の偏りが生じている。生物を幅広く学習してきた成果を適切に評価するという観点から、今後の出題内容の選定にあたっては、題材の多様化に配慮した改善が望まれる。

上記(3)に関して、今年度の「生物」の追・再試験では19問（マーク数25）で、これは昨年度の18問（マーク数25）、及び今年度の本試験の17問（マーク数25）とほぼ同様であった。また、実験設

定の説明が簡潔に書かれていたり、高度な思考力を要する設問の選択肢の数が減少していたりといった工夫が見られ、受験者の思考時間への配慮が見られた。一方で、本会が廃止を求めている「過不足なく」選択させる出題形式が複数の設問で見られた点は、看過できない。この形式は、受験者に過度な慎重さを要求し、生物に係る資質・能力とは異なる力を測ることで難易度を高めることから、本形式の廃止を求めたい。

上記(4)に関して、設問全体を通してみると、知識問題が、19問中9問であり、昨年度の18問中5問と比較すると大幅にその割合が増加している。一方で、知識を活用する設問は1問にとどまった。基本的な知識の定着を確認することは重要であるが、今後は、知識を活用して資料を読み取り、生物現象を多面的に考察する過程を適切に評価できるよう、知識問題と思考問題のバランスの適正化が望まれる。各大問の構成は、単純な知識を問う設問は1題程度とするとともに、知識を活用する設問と資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察させる設問とを、バランス良く出題していただきたい。また、その際には、難易度が過度に上昇したり、解答時間に過度の負担が生じたりしないよう配慮していただきたい。

また、出題内容において知識問題の割合が大幅に増加したことにより、本試験と比較して難易度は相対的に低くなったと考えられる。本試験と追・再試験との間で受験者の有利・不利が生じないように、難易度設定の適切な調整が望まれる。

以下に個々の設問の分析結果を報告する。

第1問 「生物の系統と進化」の単元からの出題であり、本試験の第1問と比較して、小問間のつながりが明確で、受験者が段階的に思考を進めやすい構成となっていた。基礎的な知識・理解を確認する設問から、資料をもとに考察させる設問へと無理なく展開していた点も適切であった。また、限られた資料の中で過度に時間を費やすことなく思考力を測る工夫が見られた点も評価できる。この構成により、教科書に沿って学習してきた受験者が、その成果を十分に発揮できたと考えられる。全体として完成度の高い大問であった。

問1 「生物の分類と学名」に関する知識問題であり、二名法や分類群の階層性といった基礎的事項の理解を問う適切な難易度の設問であった。

問2 「進化速度」に関する知識問題であり、DNAの突然変異と進化との関係についての基本的理解を問う適切な難易度の設問であった。

問3 「分子系統樹の作成と分岐年代の推定」に関する設問であり、塩基置換数から系統関係を判断し、さらに年代を計算させる内容であった。二つの内容について判断させる組合せ形式の出題であり、本大問の中ではやや難易度は高めであった。しかし、数的処理に過度な時間を要しないよう選択肢に工夫が見られ、学習成果を発揮しやすい設問であった。

問4 「地理的隔離による種分化の過程」について考察させる設問であり、実際の高山植物でも本州中部山岳地域の集団と、東北・北海道の集団に分化しているとの研究結果があり、実例に即した出題になっていた。また、受験者が系統関係を踏まえて考察しやすいよう工夫されていた点も評価でき、全体として良問であった。

問5 「ポリネーターの活動と高山植物の繁殖」を題材としたデータ読み取り問題であった。雪解け日の変化がポリネーターによる高山植物の結実率に影響を及ぼすというテーマは、気候変動が生態系に与える影響への理解を深めるという点で出題意図が明確であり、教育的意義が高い内容であった。

第2問 「生態系の物質生産と物質循環」の単元から、窒素の循環を題材とした出題であり、基礎的な知識・理解と資料の読み取りを組み合わせた構成となっていた。特に問3、問4は、適切な難易度を保ちながら、探究的な学習の成果を評価できるよう工夫された設問であった。一

方で、近年の本試験や追・再試験において同様の題材が用いられている点については、題材の多様化を望む意見もあった。

問1 「有機窒素化合物」に関する知識問題であり、生体構成成分についての基礎的な理解を問う出題であった。基本的な難易度ではあったものの、「過不足なく」選択する形式であり、その点では適切とは言えない出題であった。

問2 「硝化菌のはたらき」に関する知識問題であり、取り組みやすい難易度であった。

問3 「無機窒素化合物の種類と植物の成長量」に関する出題で、データ読み取りと仮説検証実験の設定を組み合わせた内容であった。(1)は、無機窒素化合物の種類による植物の吸収量の違いを読み取る問題であり、基本的なグラフ読解力を問う設問であった。(2)は、提示された仮説を検証するための実験計画を考察させる内容であった。探究的な学習の成果を評価する構成であり、③と④の判断には迷いが生じやすく、やや難易度の高い設問であった。

問4 「窒素同化の場」に関するデータ読み取り問題であり、標準的な難易度であった。実験の設定、グラフ、選択肢はいずれも明瞭で、受験者が思考を進めやすい構成となっており、適切な出題であった。

第3問 「発生と遺伝子発現」の単元から、神経の発生を題材とした出題であり、実験結果やグラフをもとに考察させる設問が含まれていた。実験を理解しやすくするために図が工夫されており、思考する時間を十分に確保するための配慮も見られた。

問1 「脊髄」に関するやや詳細な知識を確認する内容であった。解答数を二つとし、6点の配点を与えた構成については、検討の余地があるとの意見があった。また、出題内容としてはやや焦点化しすぎた印象もあり、より重要な概念を問う設問が望まれるとの指摘があった。

問2 「神経前駆細胞の分化における脊索と底板のはたらき」に関する実験考察問題であり、実験結果が明瞭で、考察しやすい設問であった。

問3 「誘導物質の濃度とニューロンの分化」に関するデータ読み取り問題。グラフを丁寧に読み取り、選択肢を適切に検討すれば正答に到達できる構成であった。図を用いるなどして、標準的な難易度となるよう工夫が見られた点について、評価する意見があった。

問4 「静止電位」に関する知識問題であり、適切な難易度の出題であった。

第4問 「生物の環境応答」と「光環境への応答」に関する出題で、「遺伝子発現の調節」を組み合わせた分野横断的な出題であった。扱われた内容は、知識・理解と思考力の双方を適切に問う構成であった。大問としては、やや情報量が多く、他の大問に比べて解答に多くの時間を要したと考えられる。

問1 「光に対する生物の応答」に関する知識問題であり、導入として適切な難易度の出題であった。

問2 「真核生物の遺伝子発現調節」に関する知識問題であった。誤答を選択させる形式であり、やや難易度が高かったと考えられるが、問われている内容はいずれも重要な事項であり、適切な出題であった。

問3 「光受容タンパク質による遺伝子発現調節」を題材とし、タンパク質の機能理解と仮説検証実験を組み合わせた出題であった。(1)は、光受容タンパク質の構造と機能を考察させる設問であった。組合せ問題にしないことで難易度を高くしすぎない工夫がされていた。(2)は、仮説検証実験の結果を踏まえて条件設定を選択させる問題で、「過不足なく」選択する形式であった。設問は4ページにわたる構成で、与えられた情報量が多く、解答には多くの時間を要したと考えられる。さらに、「過不足なく」選択させる形式であったこともあり、総じて難易度はやや高めであった。また、図3のグラフ中のZに関しての説明がなく、受験者の混乱

を招いた可能性があるとの指摘もあった。

第5問 「個体群間の相互作用」を題材とし、生態学的な視点からデータを読み取り考察させる設問が配置されていた。問3は、追・再試験「生物」第2問、本試験「生物」第5問、本試験「生物基礎」第1問A問題に引き続き、植物の根圏を扱った出題であった点が特徴的であった。特に、本試験「生物基礎」と同様に「菌根菌との共生関係」という共通の題材が用いられており、題材の重複や類似性を問題視する指摘もあった。

問1 「生物間の相互作用」に関する知識問題。種間競争と種内競争の違いや食物連鎖に関する基本的な理解を確認する出題であり、導入として適切であった。

問2 「資源をめぐる競争」に関する考察問題。河川に生息する魚類を題材とし、(1)は、河川における環境条件と個体群密度の関係を考察させる問題、(2)は、外来種導入の影響を考察させる問題から構成されていた。(1)については、環境の違いと個体群密度の関係を問う際に、適切なグラフを選択させるといった出題形式の工夫が見られた。一方で、問題文の説明を文章のみで理解させるのではなく、条件の把握や思考を助けるような図を示すべきであったとの意見があった。(2)については、生態系のバランスが移入生物によってどのように変化するかを、示された文章から考察させる出題であった。生物間の関係図は示されていないものの、与えられている条件は明瞭で、適切な難易度であった。

問3 「植物と菌根菌の相利共生」を題材としたデータ読み取り問題であり、全体として思考しやすい設問であった。(1)は「植物と菌根菌の相互作用」、(2)は「植物と異なる2種の菌根菌との間での栄養分のやりとり」に関するデータを読み取らせ考察させる問題であった。

3 総評・まとめ

今年度の「生物」の追・再試験は、学習指導要領の趣旨に沿った出題が多く見られ、基礎的知識の理解から資料や実験結果をもとに考察させる設問までを含む構成であった。各大問では、仮説検証のための実験計画や条件設定を問う設問など、探究的な学習の成果を測ろうとする意図が認められた。設問数・問題量は本試験とおおむね同様であり、思考を要する設問において選択肢数が適切に調整されていた点や、実験設定の説明が簡潔に示されていた点などの工夫が見られ、試験時間内に無理なく解答可能な水準であったと評価できる。

一方で、本試験と共通性の高いテーマが複数扱われ、題材の選定に偏りが見られた。また、本会が繰り返し廃止を求めている「過不足なく」選択させる出題形式が複数見られた点については、改善が求められる。

さらに、知識問題の割合が昨年度と比較して大幅に増加し、知識を活用して考察する設問の割合が減少した。その結果、本試験と比較して難易度は相対的に低くなった可能性がある。各大問の構成は、単純な知識を問う設問は1題程度とするとともに、知識を活用する設問と資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察させる設問とを、バランス良く出題していただきたい。また、その際には、難易度が過度に上昇したり、解答時間に過度の負担が生じたりしないよう配慮していただき、本試験と追・再試験との難易度差が拡大しないよう、引き続き適切な調整をしていただきたい。

最後に、出題にあたり、題材の選定に加え、出題形式の設計や図版作成の工夫など、問題作成に多大な労力を払われていることに対し、本会として深く感謝している。

4 今後の共通テストへの要望

出題分野及び設問構成には幾つかの課題が認められた。難易度については、本試験と比較して追・

再試験の方が適切であったと考えられるが、出題内容や構成、知識問題と思考問題の出題バランスという点では、本試験の方がより妥当であった。今後は、出題内容や、設問形式のバランスの適正化を図るとともに、本試験との難易度差にも十分配慮していただきたい。

また、本会が廃止を求めている「過不足なく」選択させる出題形式が複数見られた点についても改善を求めたい。この形式は受験者に過度な慎重さを要求し、結果として難易度や時間的負担を不必要に高めるおそれがある。出題形式の妥当性の観点から、本形式の見直し、とりわけ廃止を強く求めたい。